

1960年代メキシコにおける 農業生産の停滞と農民の周縁化 — 農業部門からみたメキシコPRI体制の危機 —

畑 恵 子

はじめに

メキシコでは1940年代から70年代初頭まで「奇跡」と呼ばれる目覚ましい経済成長が長期的に実現され、PRI（制度的革命党 Partido Revolucionario Institucional）体制の下で政治的安定と経済的發展を享受した。ところがその一方で60年代後半になると、経済格差の拡大やPRIの政治的排他性が「経済成長モデル」の矛盾として感知されるようになり、68年のトラテロコ事件¹⁾に代表される大規模な反政府行動へと発展していった。それは1929年の結党以来PRIが初めて経験した国民からの批判であった。反政府行動の担い手は学生を主体とする都市部の知識層および中間層であったが、経済成長の矛盾はまず農業部門で現れた。いわゆる農民層（campesinado）において周縁化・貧困化が進んだことに加えて、1960年代後半からは他部門に先立って農業の成長率が鈍化し、生産においても陰りが見え始めたのである。

近年に目を転ずると、国民のPRI離れは一層進み、その支持基盤は大きく揺らいでいる。それを疑う余地のない事実としてさらけ出したのは1988年の選挙結果であろう。PRIの大統領候補サリーナス・デ・ゴルタリ（Carlos Salinas de Gortari）の得票率が過去最低の、しかも前回の選挙のPRI候補者の得票率を20%も下回る50.7%にとどまったのに対して、野党候補カルデナス（Cuauhtémoc Cárdenas）の得票率は31.1%にも達した。

また、同時に実施された議会選でも、上院では初めて野党議員が当選し、下院でも500議席中240議席を野党が占めるなど、野党進出を大幅に許すことになったのである。サリーナスはかろうじて大統領に当選したが、選挙集計での不正工作の疑惑が国民の間にPRIへの不信感を募らせる結果を招いた。60余年にわたって圧倒的な優位政党としての地位を維持し続けてきたPRIが、失った正統性を回復し、支持基盤を再構築するために何らかの転換を余儀なくされているというのが、メキシコ政治の現状なのである。

国民のPRI離れの直接的な要因は1982年の対外債務危機に端を発する経済状況の悪化にあるが、その源泉は60年代半ばにまで溯ることができる。60年代後半に農業部門で生じた矛盾は解決されないままに、しかも農業部門だけにとどまることなく政治・経済全体に広がり、現在の危機を招来したと捉えることができる。このような視点に立って、農業部門を中心とした70年代、80年代のPRI体制の正統性回復に向けての努力と挫折、そして危機再生産の過程を明らかにすることに筆者の関心がある。が、本稿では60年代あたりに焦点を当てて、農業部門で生じた諸問題、とりわけ、生産停滞、農民の貧困化、農民組織の分裂という3点をPRI体制と関連づけつつ分析したい。

この3点に着目するのは、それらがPRIの正統性と密接に関わっていると考えられるからである。PRIの正統性はメキシコ革命の継承者として、その理念である「経済的近代化」と「社会正義」を具現化するという使命に依拠している。すなわち経済成長と生活水準の向上は革命の約束の実現を意味し、PRIの正統性の最も明白な証しとなるのである。また、PRIは農民、労働者、中間層を組み込んだ民衆同盟的な党組織を持っている。現実には、そのような党組織が成長実現のために民衆の要求を統制する機能を果たすことによって、革命の二つの目標の共存と均衡を保持するのに寄与してきたとはいえ、建前としては、それは民衆の利益代弁者と

してのPRIの存在を強調してきたのである。要するに成長、向上、民衆同盟はPRIの正統性を支えてきた主たる要素であったと見なすことができる。

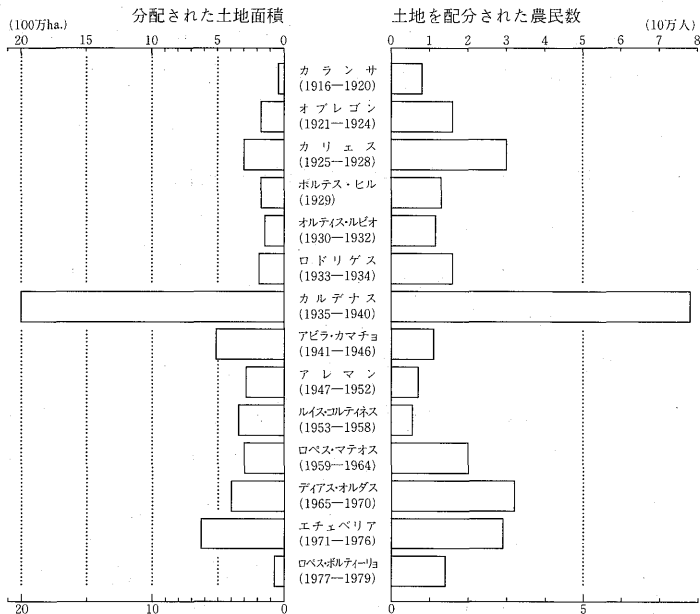
また、現在の正統性の危機は農業・農村部だけに起因するものではないが、筆者が農業部門に注目するのは、3つの理由、すなわち、まず農業部門で危機の予兆が現れたこと、第2にPRIに包摂された農民組織が重要な支持基盤を構成していること、そして少なくともレトリックのレベルでは「革命」の最も重要な精神はアグラリスモ (agrarismo 土地分配主義) であり、党と農地改革が不可分に結びつけられていること²⁾、による。

I 安定成長期における農業政策と農業構造の変化

(1) 二本立ての政策

1920年以降のメキシコの農業政策は二つの路線の間を揺れ動いてきた。一つは農地改革を通じての土地なし農民への土地分与および小農民（実際には零細農であった）育成という「分配」に力点を置いた政策で、それは「革命」の理念としての社会正義の実現であると同時に、社会・政治的安定化を目的としている。もう一つは中規模・大規模私有農地を対象とした農業の近代化政策であり、その狙いは生産の増大にある。前者は図1にみられるように、カルデナス政権期 (Lázaro Cárdenas 1934-40年) にピークを迎えるが、その結果、エヒダタリオ (ejidatario 農地改革によって私有権の伴わない土地、エヒード³⁾ ejidoを分与された農民) の数は1930年以降急速に増加し (表1参照)、5ヘクタール以下の零細農地 (私有地のみ) 数も1930年の58万から1940年93万、1950年100万へと増加した⁴⁾。エヒードは法的には農民集団に供与された共有地であるため、とくに農業統計などでは私有地と明確に区別されてきたが、実際には私有地と同じように分割された区画を個人が耕作・管理し、子供への相続も可能である。しかも多くが零細農地である。したがって、エヒード・私有地を区別する

よりも一括してミニフンディオ（零細農地 minifundio）として扱ったほうが一般的であり、実態にも近い⁵⁾。ミニフンディオでは人口増加によって土地再分割，土地の零細化がさらに進行し，また，生産のための政府援助もほとんど行われなかったために，自給のためのトウモロコシ，フリホール豆に特化した生産が細々と続けられている。そのためにこの部門は生存農業（agricultura de subsistencia）としても分類される。



※ この数値は実際に行なわれた改革の数値であり，大統領決定に基づく数値とは異なる。
 (出所) Gustavo Esteva, *La batalla en el México rural*, México: Siglo XXI, 1980, pp. 230-231.

図1 歴代大統領による農地改革（1916～1979年）

他方，農地改革によって伝統的な大私有地が解体される一方で，政府の農業政策が「生産拡大」に傾いた1940年代以降，公共投資が灌漑設備，近代的技術開発へと向けられるなか，所有面積規模はさほど大きくないが，

生産性のきわめて高い商業的・企業的農場が目覚ましい発展を遂げた。それらはネオ・ラティフンディオ (neo-latifundio) と呼ばれ、市場価値の高い農牧生産を行っている。メキシコ農牧業は1950年代には年率4.5% (農業3.8%, 牧畜業7.0%), 60年代前半には4.7% (農業6.1%, 牧畜業2.5%) という高い成長率を記録するが⁶⁾, その牽引力となったのがこうした近代部門であった。とりわけ60年代の農業部門の成長は灌漑地面積の拡大と緑の革命の効果によってもたらされた。

表1 農業就業構造の推移

(単位 1,000人)

	1930	1940	1950	1960
農業労働人口	3,626 100%	3,831 100%	4,800 100%	6,144 100%
増加率	—	5.6%	20.6%	33.0%
土地なし労働者	2,479 68	1,892 49	2,055 43	3,300 54
増加率	—	-23.7%	8.6%	60.6%
エヒダタリオ	537 15	1,233 32	1,380 29	1,500 25
増加率	—	128%	13%	8.7%
個人農	610 17	716 19	1,365 28	1,300 21
増加率	—	17%	91%	-4.7%

(出所) R. Stavenhagen, "Social Aspects of Agrarian Structure in Mexico", in *Agrarian Problems and Peasant Movements in Latin America*, ed. by R. Stavenhagen, Garden City: Doubleday, 1970, p.244

このような成長を通して、メキシコ農業は、①農産物輸出によって輸入代替工業化に必要な外貨を獲得する ②安価な工業原材料を供給する ③都市人口に安く食糧を供給し、生存コスト、労働力再生産コストを低く抑える ④工業および他の近代部門に労働力を供給するだけでなく、大規模

な労働予備軍を形成することによって賃金水準を低く抑える⁷⁾という4つの役割を果たし、経済余剰の農村から都市への移転によって、輸入代替工業化を推進したのである。しかしその一方で農村と都市の格差が拡大し、農業部門においても生存農業は発展の周辺にとり残され、技術・資本の不足によって貧困と構造的に結びつけられることになった⁸⁾。

(2) メキシコ農業の二極化

政府の二本立ての政策と生産重視の近代化政策は農業構造の二極化をもたらした。メキシコ農業の二重構造は植民地期における大土地所有制の発展を通して形成された。しかし1940年以降の政策は、土地所有だけでなく、資本・技術、生産される農産物の種類、出荷される市場など、すべての領域において二極化を進めたのである。こうした農業構造の特徴は、ミニフンディオとネオ・ラティフンディオ、生存農業・農民農業 (agricultura campesina) と商業的農業 (agricultura comercial)・資本主義的農業 (agricultura capitalista) といった対概念で説明されている。

ミニフンディオ＝ネオ・ラティフンディオとは所有する農地の規模に基づく分類であるが、同時に経営形態 (家族経営か企業的経営か)、労働形態 (家族労働か外部労働力雇用か)、市場への統合のされ方 (自己消費のための生産か市場向けの生産か、また市場向けであれば国内市場か海外市場か)、あるいは技術水準 (伝統的技術か近代的技術か) という差異も付随的に含む。生存農業と商業的農業は「何のための生産か」を基準にしたカテゴリーであり、農民農業の主たる特徴は、利潤の追求ではなく、「家族の生存と生産単位の再生産を目的とした家族労働に基づく農業生産」という点にある。若干のニュアンスの違いはあるが、ミニフンディオ、生存農業、農民農業と、ネオ・ラティフンディオ、商業的、資本的農業はほぼ同義と考えてよい。

しかし、上記の対概念は土地所有 (エヒードも含めて) を前提としているため、そこからはメキシコ農村人口の最大の構成要素である土地なし農

民（農業労働者）が外れてしまうことになる。前掲表1にみられるように、少々データは古いですが、メキシコでは農業人口の54%が土地を持たない。人数の上からだけでなく、農村社会あるいは社会全体の最下層としてさまざまな問題が集積していると推測されるこの階層を抜きにして、農業問題・農民問題を論じて、それは意味を持たないことになろう。

C E P A L（国連ラテンアメリカ経済委員会）は農業生産者（牧畜業者を除く）を農民（campesinos）、中間的生産者（productores transicionales）、企業家（empresarios）の3つのグループに分類した。それによれば、農業生産者の86.5%が農民に属し、78.3%が自給水準およびそれ以下の水準にある（表2参照）。自給できない農民家族は、当然自分の所有農地あるいは借地での農作業に加えて、生活を支えるために他の労働に従事せざるをえない。一方、土地なし農民（日雇労働者、農業労働者等）の多くは零細農やエヒード農民の家族であり、1年のある期間は家族の所有（保有）する土地での労働に従事している⁹⁾といわれる。すなわち、家族を単位にすれば農民と土地なし農民の多くは重複することになり、臨時雇いの農業労働者（trabajadores agrícolas eventuales）というカテゴリーを適用すれば、農地所有の有無に関わらず、農村人口の大半がそこに含まれることになる。アストルガ（Enrique Astorga Lira）によれば、農村部の活動人口の80%がこの範疇に該当するという¹⁰⁾。

一般的に、農民の生存のための経済活動は農業だけにとどまらず、家内工業、小商い、さらには都市や先進農業地域への出稼ぎなど多岐にわたる。そして近年ますます、農業以外の経済的活動への依存度を強めている。こうした状況を反映して、農民の家族がその生存を維持するために関わるすべての経済活動を網羅する概念として、「農民経済（economía campesina）¹¹⁾」という新たな概念が使われるようになっていく。本稿では、C E P A Lの分類による農民層はもちろんのこと、農民経済と何らかの形で関係を持っているすべての人々（出稼ぎ先から送金している零細農やエヒード農民の

家族など)を含めた広範な概念として、「農民」という言葉を用いる。

表2 農業生産者の階層構成

			農 業 生 産 者	
			実 数	%
全	体		2,557,070	100.0
農	民	層	2,212,406	86.5
(1)	生 存 水 準 以 下		1,422,896	55.6
(2)	生 存 水 準		414,001	16.2
(3)	自 給 水 準		165,805	6.5
(4)	余剰生産の可能なもの		209,704	8.2
中	間	層	297,367	11.6
経	営	者 層	47,297	1.8
小	規	模	29,173	1.1
中	規	模	9,706	0.4
大	規	模	8,418	0.3

(出所) CEPAL, *Economía campesina y agricultura empresarial*, México: Siglo XXI, 1982, p.114.

メキシコ農業では、農民の大多数を占める零細農（および土地なし農民）が自給水準にも達しないようなトウモロコシ、フリホール豆の生産に従事する一方で、人数の上では極少数の商業的農業経営者が灌漑設備、機械化等、農業の近代化を進め、その利点を独占的に享受しながら、市場で有利な換金作物を生産する、という全く異質な部門が併存している。だが、これらの二部門は相互に関連なく併存しているのではなく、農民が安価な労働力を後者に提供し、生存のために不可欠な賃金を獲得するという形で、密接な関連性を持ちつつ存続している。しかも、農民は経済成長の恩恵に

浴すどころか、農業の近代化が進展するなかで、より厳しい状況に直面せざるを得なくなった。このような意味において農業構造の二極化が問題になるのである。

Ⅱ 農業部門に生じた3つの問題

(1) 食糧生産の停滞と輸入の増加

このようにメキシコ農業は60年代半ばまで順調な成長を遂げてきたが、以後、急速にダイナミズムを失い、農業成長率は60～65年の6.1%から65～70年には1.2%に、70～75年にはさらに0.9%にまで低下した(表3参照)。とりわけ、生産が停滞したのはメキシコ国民の主食ともいうべきトウモロコシ、フリホール豆で、それに小麦、米を加えた4大基本作物の生産量の増減は表4に示されるとおりである。60、70年代にメキシコは3.2%という高い人口増加率を記録していたため、食糧生産の停滞は自給の限界を意味し、輸入の増加を招来した。

表3 成長率と人口増加率

(%)

	1930-40	1940-50	1950-60	1960-65	1965-70	1970-75
国内総生産	4.3	6.0	5.6	7.1	6.9	5.7
農林水産業	3.4	6.1	4.5	4.7	2.7	1.8
農 業	2.4	7.5	3.8	6.1	1.2	0.9
牧 畜 業	3.7	3.4	7.0	2.5	5.6	3.0
人口増加率	1.7	2.7	3.0	3.2		3.2 (1970-80)

(出所) 成長率：石井章『メキシコの農業構造と農地政策』アジア経済研究所，1985年，p.4。

人口増加率：山崎春成『メキシコ・シティー』東大出版会，1987年，p.134。

表 4 基本作物の生産量

(1,000トン)

	基本作物*
1965-67年平均	12,250.7
1968-70	12,400.8
1971-73	12,467.8
1974-76	12,558.1
1977-79	13,624.5
1980-82	17,479.2

* トウモロコシ, フリホール豆, 小麦, 米 (粳)

(出所) James E. Austin and Gustavo Esteva, eds., *Food Policy in Mexico*, Ithaca : Cornell University Press, 1987, p.217.

こうした農業生産停滞の要因としては、政府の工業偏重政策や緑の革命の効果低下に加えて、国内の食糧消費パターンの変化およびメキシコ農業の国際化に伴う「生産の再編成」を指摘できよう。すなわち、国内では都市居住者を中心に肉・加工品の需要が増え、それに対応して牧畜および飼料用作物生産のウェイトが高まり、基本作物の相対的ウェイトが低下した¹²⁾。また1960年代末に米国市場がメキシコ産の果実、蔬菜類、食肉類に開放されると、北部地域を中心に穀物生産に充てられてきた土地が輸出用農産物・牧畜物の生産へと切り替えられていった¹³⁾。この結果、トウモロコシ、フリホール豆、小麦、米などの食糧用穀物の生産が相対的に減少し、牧畜、米国市場向けの農産物（特に青果類）、飼料用のソルガム、油糧作物（ゴマ、大豆、サフラワー）の生産が拡大したのである。表5にみられるように、1960年、70年の収穫面積と生産量を比較すると、トウモロコシ、フリホール豆、小麦においては収穫面積が大幅に減少し、小麦の生産量は増加しているものの、トウモロコシは増減なし、フリホール豆では大幅な減産となっている。それとは対照的にソルガムは収穫面積、生産量ともに3倍増となった。合成飼料の原料としてソルガムの需要が急速に

伸びてきたのである。

表5 主要農作物の収穫面積と生産量

(面積1,000ha, 生産量1,000トン)

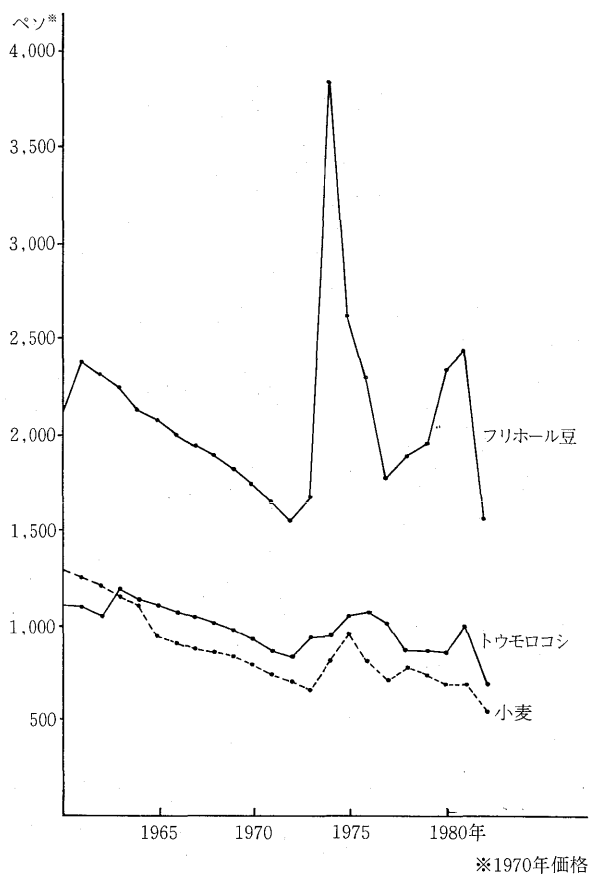
	トウモロコシ ¹⁾		フリホール豆		小 麦		ソルガム (飼料用)	
	収穫面積	生産量	収穫面積 ²⁾	生産量	収穫面積	生産量	収穫面積	生産量
1960年	6,802.6	5,706.0	741.3	661.6	846.2	1,135.2	25.1	231.7
1970年	5,828.5	5,765.4	555.9	548.4	695.2	1,778.4	85.3	696.7
増減%	-14.3	1.0	-25.0	-17.1	-17.8	56.7	339.8	300.6

1) 飼料用トウモロコシは除く。

2) 1960年統計には間作の収穫面積が記載されていないため、単作の面積のみ。1970年の面積は間作・単作の合計。生産量は兩年ともに合計。

(出所) Secretaría de Industria y Comercio, Dirección General de Estadística, *IV censos agrícola-ganadero y ejidal, 1960. Resumen general*, México, 1965, pp.211, 214, 224, 227, 250, 271, 286, *V censos agrícola-ganadero y ejidal, 1970. Resumen general*, México, 1975, pp.82, 85, 93, 95, 98, 101, 112, 120.

また、トウモロコシ、小麦などの基本作物においては、1950年代半ばに導入された保証価格制度によって穀物価格が低く据え置かれてきたことが、生産者の穀物離れに拍車をかけた。確かに、保証価格は50年代後半から62年頃までは農村部の平均価格を上回っていたが、その後両者の差は縮まり、逆転する年もみられるようになる。しかも、生産者に対する保証というより都市消費者に安く食糧を供給することが重視されるようになった結果、トウモロコシ価格は1963～1973年の間据え置かれ、実質37%も低下した¹⁴⁾。基本作物の保証価格は図2に示されるように、1970年代初めまで低下し続けた。



(出所) Steven E. Sanderson, *The Transformation of Mexican Agriculture*, Princeton: Princeton University Press, 1986, p.203.

図2 基本作物保証価格 (1960-1982年)

以上のような要因による基本作物生産の停滞によって、食糧の輸入依存度は強まった。トウモロコシについては1960年には国内生産の8.4%を輸出していたが、70年には生産の8.6%に相当する量を、80年には34.2%分を輸入するに至った。小麦については1960年代末まではほぼ自給を実現して

いたが、1970年から1980年の年平均輸入量は国内生産の22.8%に及んだ¹⁵⁾。さきに述べたように、農業部門は40年代以降、著しい人口増加にもかかわらず食糧自給を実現しただけでなく、輸入代替工業化や経済成長を支えてきた。農業生産の停滞は農業部門だけでなく、メキシコ経済全体に関わる重要性をもった問題であり、それまでの「成長モデル」そのものの見直しをも迫ることになった。また、経済だけでなく多分に政治的な問題でもあった。というのは、国民にとってさまざまな欠陥を持つPRI体制は決して最良ではないが、政治的な安定と経済的な発展を目に見える形で保証してくれるかぎりにおいて容認できるものであったにもかかわらず¹⁶⁾、その保証が食糧というもっとも根本的な部分で崩れたことを意味するからである。

食糧自給が政治問題化し、政策の最重要事項として浮上するのは70年代末のことである。当時メキシコでは石油輸出の順調な伸びを背景に、明るい将来展望と強烈なナショナリズムの高揚が見られた。ところが本来ならば国内生産によって自給できるはずの農産物輸入が増加の一途にあり、有限な資源から得られる貴重な外貨が充てられている。それは約束された未来を脅かすものである。このような危機感へのナショナリスティックな反応として、自給を目的とした「メキシコ食糧計画」(Sistema Alimentario Mexicano SAM)が、1980年に打ち出される。

(2) 農民経済の危機

同時期にメキシコ農村ではもう一つの危機が生じていた。1950年代頃まで農地改革を通して家族労働に基づく零細農業が再建されてきた。ところが、貨幣経済の浸透にともなって伝統的再分配機構、互助組織が機能しなくなったことや、政府の工業偏重政策および近代的な農業部門を中心とする生産重視の農業政策によって、農民がほとんど等閑視されてきた結果、農民経済の存続が危うくなり始めたのである。それまで農民は、家内工業や賃金労働などさまざまな経済活動によって農業生産を補填しながら生計

を維持してきたが、トウモロコシ価格の実質的低下と投入財価格の上昇などによって、1966年頃、生産コスト、生産、賃金収入の均衡がついに崩れたのである¹⁷⁾。農民は生存を維持するためにトウモロコシ生産を必要最低限にとどめ、農地への投資を控え、場合によっては土地を放棄して、農業よりも賃金労働への依存を強めていった。

このようなわけで、農民経済は農業生産よりも労働市場により強く接合されることになった。そして労働市場での商品となるペオン（peón 農業労働者）とシルビエント（sirvienta 女中）の再生産が、すなわち、生物学的な限界まで子供を生み、労働市場へ送り出すことが、農民の生存戦略としてより重要になった¹⁸⁾。しかし近年、農産物の再編成、生産サイクルの短縮化、機械化、外資系アグロインダストリーの進出等によって、労働力需要の変動、労働日数の短期化、臨時契約の増加、出来高払い労働の増加など、ペオンにとっては不利な条件が強まっている¹⁹⁾。たとえば、タマウリパス州北部灌漑地域においては、1950年代には綿花、60年代にはトウモロコシ、70年代にはソルガムというように主要農産物の推移が見られたが、それにともない年間に必要な臨時雇い労働者数は13万人から3万人、そして7000人へと減少した²⁰⁾。ちなみに、農業経済活動人口1人当たりの年平均労働日数は、ミニフンディオにおける自給用作物生産のための労働も含めて100日以下であった²¹⁾。また、農業労働者の年間平均収入は1950年の831ペソから1970年1260ペソ（1954年価格では656ペソ）へと大幅に減少しており、このような低い所得では労働力の再生産は不可能であるという。しかし農民の多くはその家族が小さな土地（借地の場合もある）で、自給用のトウモロコシ生産を行うことによって、生存の維持がかるうじて可能となるのである²²⁾。

一方、農地改革に目を向けると、前掲図1に示されるように、1940年以降、土地再分配のペースは急速に落ち、分配された土地面積および分配を受けた農民数は著しく減少している。加えて、農地改革の対象となった土

地の種類を見ると（表6参照）、農業に適した灌漑地・天水農地の比率もカルデナス政権を頂点として低下している。これらの事実、当時の人口増加を考慮すると、農地への人口圧力が急速に高まったことを意味し、農民経済がスラム地区への浸透という形で都市部にまで拡張し始めたことを示唆している。

表6 土地の種類別の分配状況

(%)

		計	灌漑地	天水農地	草地
1935-40	ラサロ・カルデナス	100.0	5.2	18.2	51.3
1941-46	アビラ・カマチョ	100.0	1.5	14.0	53.8
1947-52	ミゲル・アレマン	100.0	1.9	15.5	57.4
1953-58	ルイス・コルティネス	100.0	2.1	14.6	49.3
1959-64	ロペス・マテオス	100.0	2.0	14.7	62.4
1965-70	ディアス・オルダス	100.0	0.3	8.2	65.5
1971-76	ルイス・エチェベリア	100.0	1.6	5.6	59.0

（出所）C. Hardy, *El estado y los campesinos*, México : Nueva Imagen, 1984, p.87.

では、先に述べた生産の危機と農民の危機との間には何か関係があるのだろうか。ドゥ・ジャンヴリ（Alain de Janvry）はラテンアメリカにおける食糧危機を次のように説明する。ラテンアメリカの農民は家族労働の過剰利用によって農産物を安く生産する。また農業生産の不足分を補填するための賃金労働に対しては、生存レベル以下の賃金しか支払われていない。このような農民が商業的農業によって周縁化されるにつれて、肥沃な土地へのアクセスは低下し、生存のための生産さえ損なわれるようになる。そのために土地の放棄が進み、食糧生産セクターが崩壊していくのである²³⁾。また、ゴメス（Luis Gómez Oliver）も農業危機の一因を農民農業

と資本主義的農業の分極化とトウモロコシ栽培の停滞，すなわちトウモロコシ生産者である農民の危機に求め，二つの危機の関連性を指摘する²⁴⁾。ジャンヴリの見解に対してはワイズ（Timothy Wise²⁵⁾）が反証を試み，アストルガもメキシコの農業生産者のうち72%が自給水準以下で農産物を購入している点を強調し²⁶⁾，トウモロコシやフリホール豆の輸入増加が農民経済の崩壊およびそれにともなう生産の停滞に起因するのではない，としている。

ここではメキシコの農業統計に依拠して考え直してみることにする。二つの危機の前後にあたる1960年と1970年の農業統計を比べると，5ヘクタール以下の私有地数は91万から61万へと大幅に減少し，それが占める耕地面積も119万ヘクタール（全耕地面積の5.3%）から71万ヘクタール（3.1%）に減少した²⁷⁾。また，1965年の時点で耕作されていた天水農地200万ヘクタールが1974年には放棄されていた²⁸⁾という。一方，トウモロコシ，フリホール豆の生産の1960～1970年の変化を見ると，表7，8に示されるように，5ヘクタール以下の私有地においては収穫面積，生産量ともに減少し，衰退傾向が認められる。しかし冒頭で説明したように，エヒードもミニフンディオあるいは農民農業として捉えるならば，それが占める土地面積，収穫面積，生産量は1960～1970年に増加している。むしろ大幅な収穫面積，生産量の減少があったのは，5ヘクタール以上の私有地である。したがって，メキシコにおける食糧危機の原因はミニフンディオにおけるトウモロコシやフリホール豆の生産の減少というよりも，農業の近代部門における生産の転換にあったとみるべきであろう。

表7 トウモロコシ*の収穫面積と生産量

		収穫面積 (1,000ha)		生産量 (1,000トン)	
1960年	計	6,802.6	100.0%	5,706.0	100.0%
	私有地 5 ha以上	2,916.3	42.9	2,458.2	43.1
	私有地 5 ha以下	672.1	9.9	568.7	10.0
	エヒーード	3,214.1	47.2	2,679.1	46.9
1970年	計	5,828.5	100.0%	5,765.4	100.0%
	私有地 5 ha以上	1,677.0	28.8	1,753.7	30.4
	私有地 5 ha以下	388.4	6.7	341.2	5.9
	エヒーード	3,763.1	64.5	3,670.5	63.7

* 飼料用トウモロコシを除く。

(出所) IV *censos agrícola-ganadero y ejidal*, 1960. *Resumen general*, pp.244, 247, 250. V *censos agrícola-ganadero y ejidal*, 1970. *Resumen general*, pp.93, 95, 98, 101.

表8 フリホール豆の収穫面積と生産量

		収穫面積 (1,000ha)*		生産量 (1,000トン)	
1960年	計	741.3	100.0%	661.6	100.0%
	私有地 5 ha以上	349.4	47.1	302.8	45.8
	私有地 5 ha以下	22.8	3.1	18.9	2.9
	エヒーード	369.1	49.8	339.9	51.3
1970年	計	555.9	100.0%	548.4	100.0%
	私有地 5 ha以上	168.8	30.4	182.4	33.3
	私有地 5 ha以下	11.4	2.1	15.6	2.8
	エヒーード	375.7	67.5	350.4	63.9

* 1960年統計には間作の収穫面積が記載されていないため、収穫面積は単作の場合のみ。生産量については単作、間作の合計。

(出所) IV *censos*, pp.211, 214. V *censos*, pp.82, 85.

商業的・企業的農業部門はそれ以前も比較優位の原則に基づき、市場で有利な作物の生産に従事していた。したがって、60年代半ばに生じた作物の転換も、彼らの経済論理からすれば、当然の選択だったのである。先にも述べたタマウリパス州北部灌漑地域における主要農産物の推移は、こうした市場の動きを反映している。1950年代末、綿花の国際価格が下がり始める一方で、保証価格制度の下でのトウモロコシ生産が有利になった。すると、綿花栽培は州南部・中央部の天水農地へ移行し、北部灌漑地域ではトウモロコシ生産が拡大して、1965年には灌漑地面積の72%を占めた。60年代後半に、多国籍企業の飼料用穀物の需要が高まると、ソルガムがトウモロコシに代わって主要産物となった。さらに70年代半ばから80年代初頭にかけて、政府がトウモロコシやフリホール豆の増産のために保証価格を上げた時には、これらの作付面積が拡大した²⁹⁾。この地域では保証価格、市場に呼応した農業経営が行われているのである。

農民農業は生産停滞の直接的原因ではないが、逆に、生産の危機を引き起こした諸要因、すなわち商業的農業部門におけるより収益性の高い作物への転換および農業の近代化（機械化など）は、生産投入材の価格上昇、小規模農地の実質的な併合等を通して、また農民から臨時雇い労働への就業機会を奪うことによって、農民に深刻な影響を及ぼしている。しかも農民の過半数が自給水準以下、すなわち市場における食糧購入者であるために、生産の危機による消費者価格の上昇は農民経済を直撃することにもなる。このように、30年に及ぶ経済成長にもかかわらず、農民はその周縁に取り残されただけでなく、かれらを取り巻く状況は厳しさを増し、その生存さえもが脅かされるようになったのである。

(3) 農民組織の分裂と独立系組織の発足

革命の動乱を收拾する過程でメキシコはポピュリスティックな性格を形成してきたが、それが制度化されたのは、1938年にカルデナス大統領によって国民革命党（PNR Partido Nacional Revolucionario）がメキシコ革命党

(P R M Partido Revolucionario Mexicano) に再編されたときであった。それまで革命期に台頭した地方ボスの集合にすぎなかった革命党は、農民、労働者、中間層を組織化し、党組織に組み込んだポピュリスト政党へと変貌した。革命党が代表する国家は、民衆同盟の調停者としての役割を担うことになったのである。この変革にともなって、農民は全国農民連盟 (C N C Confederación Nacional Campesina) に統合された。そしてそれが革命党農民部会の中心を構成することになったのである。C N Cは1933年に結成されたメキシコ農民連盟 (Confederación Campesina Mexicana) を前身とする組織で、P N Rに従属した形で、カルデナス政権期の農地改革をとおして土地の分配を申請する農民、分与を受けた農民を中心に組織化を進めた。1938年のP R Mの設立時の農民部会のメンバーは250万人で、労働部会の125万人、一般部会 (公務員組織を主体とする) の5万5000人、軍部会の5万5000人³⁰⁾をはるかに上回り、人数の上ではP R Mの中核を成していた。

1940年にアビラ・カマーチョ (Avila Camacho 1940~1946年) 政権が発足すると、政府の政策は農地改革から大きく後退しただけでなく、これまでの改革の成果をなし崩しにしようとする動きさえ見られるようになった。反農地改革的な潮流が強まる中で、C N Cは党および政府によって新たな政策への適応を迫られる。そしてアグラリスモの代弁者ではなく、農民の意気をそぎ、動員を妨げることを自らの使命とするようになった。また農民の間でも、C N Cは自分たちの利益の防衛手段というよりも政府の政策の支持手段である、という認識が強まっていった。C N Cがいつも容易に自己転身したのは、それが農地改革の申請者と受益者から構成されていたがために、政府に対する従属性が強かったことによる。

アビラ・カマーチョ政権発足当初には、突然の政策転換に反発して年間200件を越す農民の土地占拠行動が起きたが、中盤には30件台、1946年にはわずか6件に減った。一方、農地改革の適用を受けた地主側からの苦情

件数も1941年の769件から1946年には36件に減少した³¹⁾。アレマン政権（Miguel Alemán 1946～1952年）に入ってこの傾向は一層強まるが、C N Cはアグリスタの旗さえももはや掲げることができない状態になった。こうしたなかでC N Cの分裂が起き、離脱派は、P R I労働部会の中心組織メキシコ労働者連盟（C T M Confederación de Trabajadores Mexicanos）を追放されたグループと労働・農民同盟（Alianza de Obreros y Campesinos）を組織し、これがもう一つの独立系組織である労働者単一連盟（Confederación Unica de Trabajadores）と合併して、1949年に労働者・農民総同盟（Unión General de Obreros y Campesinos U G O C M）が発足した。これは公的権力、パトロン階級からの完全な自立を標榜し、ソノラ、シナロア、チワワ、ナヤリなど北部地域で勢力を拡大していった。U G O C Mは初めての労働者・農民の合同組織であったが、じきに労働者が分離して、1951年には農民組織となった。政府はU G O C Mの分裂工作を続け、1956年には一部をC N Cに取り込むことに成功した。しかし、それは50年代末には複数の州にまたがる唯一の独立系農民組織として、とくに北部地域で大規模な土地占拠行動を指揮したのである。この期の北部諸州ではとりわけ農業労働者の失業問題が深刻化していた。50年代半ば、米国がメキシコ人農業労働者「ブラセーロ」の送還を始めたのに加えて、綿花など商品作物の国際価格が下落したのである。土地、雇用機会、賃金保証の要求の高まりを受けて、U G O C Mは1958年にシナロア州ロスモチスで会議を開き、年内に土地分配要求の解決が見られないときには土地占拠を実施するとの声明を発表し、そのとおりに翌年から北西部諸州で行動を開始した。そして、このような農民の行動は北部以外の地域でもU G O C Mという組織を越えて広がっていった³²⁾。

農民闘争は60年代の半ばには収束し、再度活発化するのは70年代に入ってからのものである。U G O C Mはその後、闘争手段、組織の性格と有効性をめぐって内部論争が続き、1971年指導者ハシント・ロベス（Jacinto

López) の死去に伴い3グループに分裂する。一部を除いて、1974年の農村同盟 (Pacto de Ocampo)³³⁾ への加盟、1976年の最大グループのPRIへの統合など、政府への接近を強めていく³⁴⁾。そして70年代初頭、北部地域で土地占拠行動が再発したときには、そのイニシアティブをとれるほどの力を残してはいなかった。だが、UGOCMの設立と50年代末の占拠行動は、PRI政権が農民に果たすべき「革命の約束」を放棄したことに対する批判であり、CNCの代表性の喪失、ひいてはPRIの代表性の喪失を意味するものであった。

CNC、PRI批判は1963年の独立農民連合 (Central Campesino Independiente CCI) の結成によっても表出した。しかもCCIがカルデナス元大統領の支持を得たことによって、CNCの正統性は一層崩されることになったのである。CCIは1961年に発足した民族解放運動 (Movimiento de Liberación Nacional MLN) の農民部門を構成していた。それは労働者、農民、学生などさまざまな集団を巻き込んで、キューバ革命の勝利をうけて反帝国主義的意識を高め、ナショナリスト、民族主義者としてのカルデナス主義の復活を図ろうとする運動で、硬直化した制度に代わる真の大衆組織の設立を意図していた。CCIは50万人の農民を代表する組織として発足したが、そこにはPRI系組織から共産党系までさまざまな政治的潮流を包含していた。そのため、MLNもCCIも内部対立、亀裂を余儀なくされることになる。また、60年代の民衆運動の全体的な退潮ムードや政府系、その他の組織による攻撃もCCIの分裂を促進した。結局CCIも1970年に主要部分がPRIに取り込まれ、農村同盟に加盟し、70年代前半の農民闘争においては、当初、観客としての地位にとどまらざるを得なかった。しかし、最後まで政府から自立を主張したグループは1975年に農業労働者・農民独立連合 (Central Independiente de Obreros Agrícolas y Campesinos CIOAC) を組織し、農業労働者の利益防衛を目的とした新たな活動を開始した³⁵⁾。

60年代後半にはUGOCMもCCIも、農民を大規模に動員する能力に欠け、ましてや失速した農地改革を回復するほどの力はなかった。しかし、このような独立系組織の発足は、農民がもはやCNCやPRIを自らの利益の代弁者とは見なさなくなったということであり、農民部門において民衆同盟の一角が崩されたことを意味する、と考えられる。1958年のPRIの部会構成をみると、農民部会266万人、労働部会211万人、一般部会185万人で³⁶⁾、さきに述べた1938年の数値と比べると、農民部会はほとんど増えていない。この事実も農民のPRI離れ、あるいはPRIの農民離れ（切り捨て）を示唆するものであろう。しかし、少なくとも70年あたりまでは、CNCあるいはPRIはUGOCM、CCIのような独立系組織に対して、ある程度の取り込みに成功するだけの力をまだ保持していた。だが、政府の農地改革軽視とCNCの無力化に起因する独立系組織の動きは、70年代、80年代を通してさらに強まり、調停者としての政府の威信を一層低下させることになるのである。

むすびにかえて

このように60年代までにメキシコの農業・農村部門では、国民の食糧となる基本作物生産の停滞、土地分配の軽視と農民切り捨ての農業政策による農民の貧困化、農民の利益代弁者としてのCNCの役割低下と農民のCNC離れ、という問題が明確に現れ、PRI政権の基盤を崩しかねない危険性をはらみつつあった。

危機に瀕したPRI体制を再建するために、70年に発足したエチェベリア（Luis Echeverria 1970～1976年）政権は農地改革を再開し、農民の支持を取り付けようとする。しかし、政府系のCNC、UGOCM、CCIに農民に対する統制力が欠けたままの状態、農民の土地への期待を刺激したために、新たな独立系組織の活動が強まった。農村部での社会不安の高まりに対して農業企業家は強く反発し、それまで以上に政治・経済的混

乱を招くことになった。続くロペス・ポルティエーリョ政権 (José López Portillo 1976～1982年) は前政権の失敗に鑑みて、アグラリスモに終止符を打ち、生産優先主義の、とくに食糧自給の実現に焦点を当てた政策へと転換した。だが、これもほとんど頓挫しかかっていたときに、対外債務危機が発生したために放棄された。80年代以降の政権下ではアグラリスモはほぼ放棄され、農業政策においてもネオ・リベラリズム的傾向が強まっている。これらはPRIの民衆同盟構造の根本的な再編過程として捉えることも可能なほどに³⁷⁾、重要な変化である。

結局、70年代移行の各政権は60年代に露呈した矛盾を解決できないままに、現在に至っている。それだけでなく、近年には、従来の枠組での正統性回復の努力を放棄し、問題を党の再編という全く別の次元に移行しようとする動きさえ見られる。このように70年代以降の農業政策の動向は、PRI体制の変化をみるうえできわめて重要なテーマであるが、その分析は別稿の課題としたい。

注

- 1) オリンピック開催を間近にひかえた1968年10月2日に、集会のためメキシコ市中央に位置するトラテロルコ広場に集まった群衆に対し、動員された陸軍兵士が発砲し数百人の死者を出した事件。
- 2) Steven E. Sanderson はメキシコのポピュリズムを「Agrarian Populism」と呼んでいる。*Agrarian Populism and the Mexican State*, Berkeley : University of California Press, 1981.
- 3) エヒードと私有地の根本的な違いの一つは、エヒードの場合、農民 (エヒダタリオ ejidatario) が有するのは土地の利用権のみで所有権は無いという点にある。したがって建前上は土地を売却、賃貸、抵当に入れることができない。しかし、実際には賃貸しているケースもかなり多かった。1980年以降は、エヒードと私有地が自由意志に基づいて合体し、効率的な「生産単位」 (Unidad de producción) を形成す

ることが、政府によって奨励されているため、両者の区別は不明瞭になってきている。

- 4) Secretaría de Economía, *Tercer censo agrícola-ganadero y ejidal, 1950. Resumen general, Predios de 5 hectáreas o menos*, México, 1955, p.5.
- 5) スターベンハーゲン (Rodolfo Stavenhagen) は「エヒードとミニフンディオの間には厳密には土地所有という点で違いがあるが、エヒードの大半は機能的にはミニフンディオである」と指摘している。(C E P A L, *Economía campesina y agricultura empresarial*, México: SigloXXI, 1982, p.50.) にもかかわらず、エヒードは農地改革の実施を約束したメキシコ革命体制の所産であるため、1970年までの農業センサスではエヒードと私有地 (5ヘクタール未満と5ヘクタール以上) という分類枠が設けられている。
- 6) Freebairn, "Agricultural Interaction between Mexico and the U.S.", *Journal of Interamerican Studies and World Affairs* 25(3), August 1983, p.278.
- 7) Warman, Arturo, "El problema del campo," en *México hoy*, ed. por Pablo González Casanova y Enrique Florescano, México: Siglo XXI, 1979 (5^a ed. 1981), p.108.
- 8) Aguilera Gómez, Manuel, *La reforma agraria en el desarrollo económico en México*, México: Instituto Mexicano de la Invetigaciones Económicos, 1969, pp.227-233.
- 9) Reyes Osorio, Sergio et al., *Estructura agraria y desarrollo agrícola en México*, México: Fondo de Cultura Económica, 1974, p.425.
- 10) Astorga Lira, Enrique, *Mercado de trabajo rural en México: La mercancía humana*, México: Era, 1985, p.16.
- 11) 農民経済という概念は19世紀末、農業危機に直面したロシアにおいて、生産の安定的確保のためには大土地所有ではなく小農民を中心とした農民農業の方が適していると主張したグループによって形成された。そしてロシア革命後には、家族労働に基づく小農民の育成を主張する農民経済支持者たちは、徹底的国有化を主張するマルクス主義者と対立した。農民経済の理論化は農業経済学者チャヤノフ (A.V.Chayanov) によって行なわれたが、1960年代に再発見されるまで、その業

- 績は長く知られることがなかった。メキシコでは、近代化されることなく、また農村プロレタリアート化することもなく存続している生存水準以下の零細農民層を分析するための新たな概念枠組として、1970年代以降、農民経済、農民農業という概念がしばしば用いられるようになった。チャヤノフ理論およびそれをめぐるラテンアメリカにおける論争については A. V. Chayanov (D. Thorner and B. Kerblay eds.), *The Theory of Peasant Economy*, Illinois : The American Economic Association, 1966, Klaus Heynig, "Principales enfoques sobre la economía campesina," *Revista de la CEPAL* Núm. 16, abril de 1982に詳しい。
- 12) この現象は農業の牧畜化 (ganaderización, cattle-ization) と呼ばれる。
 - 13) Gates, Marilyn, "Codifying Marginality : The Evolution of Mexican Agricultural Policy and Its Impact on the Peasantry, " *Journal of Latin American Studies* 20 (2) , 1988, pp.281-283, Barkin, David, "The End to Food Self-Sufficiency in Mexico, " *Latin American Perspectives*, Issue 54, 14(3) , Summer 1987, p.281.
 - 14) Montañez, Carlos y Horacio Aburto, *Maíz : Política institucional y crisis agrícola*, México : Editorial Nueva Imagen, 1979, pp.246-247.
 - 15) Barkin, David y Blanca Suárez, *El fin de autosuficiencia alimentaria*, México : Editorial Nueva Imagen, 1982, p.154.
 - 16) Pozas, Luis, *Democracia a la mexicana*, México : Diana, 1986, p.29.
 - 17) Arizpe, Lourdes, *Campesinado y migración*, México : SEP, 1985, p.74.
 - 18) このような生存戦略については、前掲のArizpe, Astorga Liraの著書に詳しく述べられている。
 - 19) Astorga Lira, E. *op.cit.*, pp.49-76.
 - 20) Contreras, José Luis, *Mecanización agrícola, empleo y migración en el norte de Tamaulipas*, Tijuana : El Colegio de la Frontera Norte, 1987. pp.25-26.
 - 21) Astorga Lira, E., *op.cit.*, p.50.
 - 22) Paré, Luisa, *El proletariado agrícola en México*, México : Siglo XXI, 1977 (4^a ed. 1981), p.8.

- 23) Wise, Timothy, "The Current Food Crisis in Latin America : A Discussion of de Janvry's The Agrarian Question, " *Latin American Perspectives*, Issue 54, 14 (3) , Summer 1987, pp.299-300.
- 24) Gómez Oliver, Luis, "Crisis agrícola, crisis de los campesinos," *Comercio Exterior* 28 (6) , Junio de 1978, pp.725-727.
- 25) Wise, T. , *op.cit.*
- 26) Astorga Lira, E. , *op.cit.* , p.13.
- 27) Secretaría de Industria y Comercio, Dirección General de Estadística, *IV Censos agrícola-ganadero y ejidal, 1960. Resumen general*, México, 1965, pp.1-3, 16. *IV censos agrícola-ganadero y ejidal, 1970. Resumen general*, México, 1975, pp.5-7, 19.
- 28) Arizpe, L. , *op.cit.* , p.74.
- 29) Contreras, J. L. , *op.cit.* , p.17-24.
- 30) Liuewen, Edwin, *Mexican Militarism : The Political Rises and Fall of the Revolutionary Army, 1910-1940*, Albuquerque : University of New Mexico Press, 1968, p.125.
- 31) Bartra, Armando, *Los herederos de Zapata : Movimientos campesinos posrevolucionarios en México*, México : Era, 1985, pp.67-68.
- 32) Hardy, Clarisa, *El estado y los campesinos : La Confederación Nacional Campesina*, México : Nueva Imagen, 1984, pp.33-35. Bartra, A. , *op.cit.* , pp.80-82.
- 33) 農村協定とは、農村部で土地占拠行動が活発化するなか、1974年にCNC、UGO CM、CCIと政府の間で結ばれたもので、各組織は政府政策の支持と、占拠行動への不参加を約束した。
- 34) Hardy, C. , *op.cit.* , pp.36.
- 35) *Ibid.* , pp.37-38. Bartra, A. , *op.cit.* , pp.92-93.
- 36) Scott, Robert E. , *Mexican Government in Transition*, Urbana : University of Illinois Press, 1964 (rev. ed.) , pp.166-167.

- 37) Steven E. Sandersonは、ロペス・ボルティーリョ政権における産業資本家との関係修復は国家とブルジョワジーの将来の関係を示唆するものであり、この時点で国家はその権力を資本家層に委譲したと指摘している。S. E. Sanderson, *op. cit.*, p.202. また恒川恵市は、ボルティーリョ政権以降、経済的近代化と社会正義の実現という二つの目標の両立が不可能となり、サリーナス政権は二つの目標間のバランスに基づく広範な支配同盟によって支えられてきたPRI体制の解体と、新たな支配同盟の形成に向かっていると捉えている。恒川恵市「メキシコPRI体制の危機と再編1971-1990年」『アジア経済』31巻11号 1990年11月 12～13ページ。